

第十七期登山学校

第四回講座

「地図の読み方」講座
第十七期受講生 高荷一良

【机上講習】

机上講習前は、正直、地形図がどれほど役立つものが全く理解しておりませんでした。何しろ学生時代の地理の授業、退屈で早く終わることばかりを考えていたくらいでしたから……。

尾出講師、八木原講師から説明を受けても、懐かしい学生時代のさんざんな社会の成績を思い出すばかりでした。それが、実際、赤と青鉛筆を駆使して一万二千五百分の一の地形図に尾根と谷を書き込んでいくと「おおっ！」

と叫び出さずにはいられなくなるような感覚が湧き上がりました。

「赤色が尾根、青色が谷、ここがこうなっていくとここはこうかな……」

独り言を重ねるたびに地図は立体的となり、息づいていきます。そして、出来上がった赤の線をつないでいくと、歩く道が出来上がっているではありませんか。それを実際のコース図と比べてみると……。

細い目がカッと見開くほどの感動です。

さらに等高線をみなが

ら高度表に高さや距離を落とし込んでいくと、緩やかな斜面と急斜面が目瞭然でわかります。講座が始まる前は遠い記憶の地理の知識が、ふいに眼前に現れ、握手を求められたかのような感じでした。

これを持ってさあ明日は菊花山へ出発です。

【実技講習】

菊花山がある駅は猿橋駅です。ここまで到着するまで、自宅からおよそ三時間かかりました。この時間が、昨日の復習をするのにもつてこいのひと時です。地図を手元におきながら磁北線の確認やコンパスの使い方など、車窓に広がる風景には目もくれず、ひたすら地図に没頭していきます。それでも『あれっ』と首をかしげる自分がいます。『忘れたわけではないけれど』記憶の容量が減ってきているのかも知れません。

それはさておき、生憎の空模様というのか絶好の登山日和というのかはわかりませんが、合羽の登場を願う日となりました。雨の対策としてビニールケースも必要です。事前に水谷講師坂元講師よりレクチャーを受けていた私たちチームの面々は、誰一人怠りありません。流石です。

濡れた舗道をチームごと

に出発です。登山口はここが入り口かと思うほど草木に蔽われていました。まさしく掻き分けて中に入る感じでした。

等高線を見ると最初は緩やか、途中から坂が急になつていきます。雨露を払いのけながらイメージを膨らませていきます。次に会う坂には何があるのだろうか、どんな草花が待ち受けているだろうか、そう考えるだけでワクワク感に満ちていきます。

そんな時、水谷講師の冷静な指摘が飛んできます。「谷がどうなっているか……」

「尾根はどう続くか……」
「傾斜はどうなってる？」
「地図の見方を自分の味方にする瞬間でもありません。メンバールの皆さんは、慌てず騒がず、落ち着いて地図にコンパスに向かい合っています。浮かれているのは私だけのようです。自分も見習いつつ汗だくでしっかりと地に足をつけて歩を進めました。」

神楽山から菊花山のルートは、眺望が素晴らしいと声高には叫べないかも知れませんが、湧き上がる風の心地よさとちよつとスリルある岩場は山に登る楽しさを味わうにはもってこいの場所です。今回の講座で学んだことを生かしな

がら、さらなる精進を目指して次回も張り切つてまいります。山に登るたびに人生の引出が増えるようですね。ぜひ面白いですねえ。

講師の皆様、メンバーの皆様、受講生の皆様、今回もありがとうございました。

き上がった見えてきました。自分だけの鳥瞰図を眺めている気分させる作業となりました。断面図の作業は、標高と距離を地図から読み取り、プロットするだけで一杯。ガイドブックに記載されている平均的な歩行時間には、高低差と距離が加味されていることを改めて実感。地図の【北】と【磁北線】の違いも初めて知りました。

【二日目】9月2日(日)
実技講習

9時、中央線猿橋駅集合。明け方から雨。家を出る時モヤモヤになく、中央線に乗っても、雨の強さを確認するために車窓を見て猿橋まできました。

【一日目】9月1日(土)
机上講習

地形図を読み解くのは、学生のとき以来でした。登山のガイドブックの地図には、断面図も時間もすべて記載してあり、「地図は無理」と思っていました。

稜線を赤、谷線を青でなぞり、より高いところ、より深いところを色濃くしてみる、それだけで、地形が浮

り口へ、前の班も同様にユーターン。登山口付近は、背丈ほどある藪が続く登山道でした。ポイントでは、標高・時間確認、周辺の地形確認。雨は降つたりやんだりでしたが、樹林帯だったので、気になるほどではありませんでした。神楽山の山頂では、周辺の山を見渡すほど開けていません、アンテナがあることは確認できました。御前岩下部に

て昼食、雨も止んで、涼しい風がとるだけで快適に感じました。その後、ポイントの確認は続きましたが、周辺の地形を地形図と確認しながら行動することはできませんでした。電波反射板のポイントは、通り過ぎてしまい、道迷いを想像させました。無辺寺までの下りは、ロープを準備していたが、無事下山することができました。

運営委員の皆様、今回もあたたかく見守っていただきありがとうございます。

たたく見守っていただきありがとうございます。

たたく見守っていただきありがとうございます。

たたく見守っていただきありがとうございます。

たたく見守っていただきありがとうございます。